

**【旧約聖書日課】出エジプト記 23章10～13節**

10あなたは六年の間、自分の土地に種を蒔き、産物を取り入れなさい。11しかし、七年目には、それを休ませて、休閒地としなければならない。あなたの民の乏しい者が食べ、残りを野の獣に食べさせるがよい。ぶどう畑、オリーブ畑の場合も同じようにしなければならない。

12あなたは六日の間、あなたの仕事を行い、七日目には、仕事をやめねばならない。それは、あなたの牛やろばが休み、女奴隷の子や寄留者が元気を回復するためである。

13わたしが命じたことをすべて、あなたたちは守らねばならない。他の神々の名を唱えてはならない。それを口にしてはならない。

**【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 14章1～9節**

1信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。2何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。3食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです。4他人の召し使いを裁くとは、いったいあなたは何者ですか。召し使いが立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、召し使いは立ちます。主は、その人を立たせることができになるからです。5ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。それは、各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです。6特定の日に重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。神に感謝しているからです。また、食べない人も、主のために食べない。そして、神に感謝しているのです。7わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。8わたしたちは、生きるもすれば主のために生き、死ぬもすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。9キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きていられる人にも主となられるためです。

## 【福音書日課】ルカによる福音書 14章1～6節

<sup>1</sup>安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。<sup>2</sup>そのとき、イエスの前に水腫を患っている人がいた。<sup>3</sup>そこで、イエスは律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた。「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか。」<sup>4</sup>彼らは黙っていた。すると、イエスは病人の手を取り、病気をいやしてお帰しになった。<sup>5</sup>そして、言われた。「あなたたちの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。」<sup>6</sup>彼らは、これに対して答えることができなかった。

### 安息日に…【こども説教のために】

主イエスの時代よりも千年以上前、イスラエルの人々に神の教え（律法）を伝えたのは、モーセという人でした。主イエスの時代、イスラエルの歴史を受け継いだユダヤ人は、モーセが伝えた神の教えの中でも、七日目ごとにすべての人が仕事を休むという「安息日」の教えを、徹底して守るようになっていました。「安息日」にユダヤ人は、神が天地を創造された七日目に御業を休まれて造られたすべてのものを祝福された、という古い言い伝えを想起し、ただ仕事を休むだけではなく、会堂に集まって神を礼拝するのです。そして、会堂での礼拝が終わると、誰か仲間の家に集まって食事を共にして過ごすようになっていました。

主イエスや弟子たちも、他のユダヤ人と同じように、「安息日」には会堂で礼拝に加わり、その後、招かれた家で食事を共にすることが常だったようです。その「安息日」にも、主イエスは、病気の人を見つけると、手を伸ばして病気を治してくださったと伝えられています。

ところが、そのことを批判する人々がいました。「安息日」にはすべての人が仕事を休むことになっていましたから、病気を治す働きも「安息日」以外の日にすべきだと考えたのです。けれども、主イエスは、「安息日」に病気を治す働きをおやめになることはありませんでした。他の日には自分の仕事をしていて、「安息日」にしか主イエスとお会いすることができない人がいることを、ご存じだったからかもしれません。

皆が仕事を休むのは、皆が元気を回復するためなのです。仕事を休み、共に集まる神の子らは、互いの元気を回復させることができるでしょう。

## 元気を回復する日

石神井教会に限ったことではありませんが、夏の暑い時期は日曜日の礼拝出席者数が何割か少なくなる傾向があります。厳しい暑さを避けて外出を控えている方もいらっしゃるでしょう。この季節に家族や親しい者と過ごすことを教会出席よりも優先させているという方もあるかもしれません。あるいは、季節に関わらず、日々の仕事で疲労困憊しており日曜日に教会に行く元気がないと、正直におっしゃる方もあります。信者であるからには日曜日の礼拝出席は厳守すべきだと教える教会もありますが、わたしは牧師として、**皆さん各自が自分の心の確信に基づいて決めればよい**と考えています。このようなことを言うと、同業の牧師に叱られそうですが、わたしは、少なくとも使徒パウロがそのように教えていると信じて、申し上げるのです。

もちろん、余程のことがない限り必ず日曜日の礼拝には出席する、という方も少なくありません。それが習慣となっていて、日曜日の午前中に教会に行かないと一週間、調子が悪い、とおっしゃる方もあるでしょう。日曜日には、たとえ旅行先でもどこかの教会の礼拝に出席する、という方も少なくないのです。

15年前に亡くなったわたしの父は、50代まで外科医として病院に勤務し、その後も勤務医として亡くなる前年まで仕事を続けていました。勤務先の病院は週休二日だったはずですが、父は、月曜日から土曜日まで休むことなく仕事に出ていました。休日の一日も、別の病院で働いていたのです。まさに、「**あなたは六日の間、あなたの仕事を行い**」という御言葉どおりの生活でした。仕事人間の父でしたが、高校生で洗礼を受けた教会には、余程のことがない限り欠かさず出席していました。子どもたちが小さいころには、母と子らを家に残しても、自分は教会に出席するような人だったのです。わたしは、まだ子どもの時分に、父に「なぜ医者になったのか」と尋ねたことがあります。そのとき父は、「医者になれば、日曜日に休まず教会に行けると思ったから」と答えました。医者であれば、休日の接待ゴルフなどをする必要がないから、という意味でそう答えたのだと思います。それにしても、わたしは子ども心に、強烈な印象を受けました。高校生で信者になった父は、「日曜日に休まず教会に行ける職業」を選んだということだったからです。それは、おそらく父だけでなく、父同様に日曜日の教会に欠かさず通っていた父と同世代の人たちや先輩たちの多くが、そう考えていたのでしょう。確かに、そのような壮年婦人たちが溢れた教会でした。「日曜日の教会に通う」ことが、日々の生活を成り立たせる必要条件であり、共に集まる「日曜日の教会」で元気を回復して、またそれぞれの六日の日常生活に帰っていくのです。それは、理屈ではなく、身に着いた習慣としか言いようのないことなのです。

## あなたが元気になるために

主イエスが安息日の会堂や食事の席で病人に接していらっしやる場面を読むとき、わたしは、あの「教会大好き」な父を思い出します。礼拝が終わり、毎週提供されていた軽食を食べている人たちから少し離れたところで、父はしばしば誰かの話を聞いていました。父いわく、「無料で医療相談を受けていた」のです。日曜日の教会に欠かさず出席している医者や、仲間たちにとっては、手近な「かかりつけ医」であったようです。相談して、何でもないと安心して帰る人もあれば、どこかの専門医を紹介してもらう人もあったようです。父は、若いころには無医村に出かけて行ってボランティアで無料の医療相談を受けるといった活動もしていた人でしたから、日曜日に信者の仲間から相談を受けることも苦ではなかったのかもしれませんが。もっとも、自宅にまで電話をしてきて相談する人があると、「病院に行って相談したら診察料何千円がかかるのに」と家族に愚痴を言うこともありましたが。

主イエスは、医者として病人の治療をなさることができたのでしょうか。それとも、神的な力で病気治癒の奇跡をなさっていたのでしょうか。「福音書」には、主イエスが病気を治されたことを見て、周囲の者が驚いたと伝える逸話もあれば、周囲の者も当たり前のようにそれを受けとめたと伝える逸話もあるようです。どちらにしても、主イエスは、安息日であろうと、他の日であろうと、病気を患う者と出会われると、彼ら彼女らの病気を治し、癒されたのです。

少し不思議に思えることが、「ルカ福音書」にはあります。主イエスが病気を治されたのが安息日であった場合には、主イエスご自身がその病人に働きかけられていたと伝えてあります(6:6 以下、13:10 以下、14:1 以下)。他方で、安息日ではない折には、主イエスが積極的に病人に近づいて癒されたようには伝えられていません。病人自身や周囲の者が主イエスに近づき願ってはじめて、病気が癒されたというのです。

「安息日」には、特別に主イエスが病人に近づき、病気を癒される理由があったのでしょうか。その日にしか主イエスと出会うことができない者があったからかもしれません。あるいは、むしろこういうことかもしれません。主イエスは、その日こそが、病んだ者に手を伸ばし、触れ合い、その人の元気を回復させるときであるとお考えだったのではないのでしょうか。

その日は、神が創造の御業を完成され、休まれたことを記念する日です。御業を完成されて休まれた神は、造られたものをすべて祝福なさいました。

六日の働きを終えて迎えた日、その働きのために用いたわたしたちの手は、明け渡されています。仲間の一人に触れるために、元気を回復する必要のある仲間のために、この手は、今日、互いに明け渡されているのです。